

位置変化動詞と状態変化動詞の接点^{*1}

——いわゆる「壁塗り代換」を中心に——

川野 靖子

キーワード:壁塗り代換、位置変化、状態変化、格交替、ヲ格

要 旨

本稿の目的は「壁塗り代換」の成立条件を導き、それを通じて位置変化動詞と状態変化動詞の接点について論じることである。代換可能な動詞は「物の位置変化」と「場所の状態変化」の両方を表す動詞であると考えられるが、代換可能な動詞と代換不可能な動詞の区別はこの場合の「場所の状態変化」の内容を以下のように定義してはじめて可能となる。

「壁塗り代換」における「場所の状態変化」

- A. 「場所」がその表面を「物」ですべて覆われた状態になること
- B. 「物」と結合した「場所」が感覚的判断を伴った状態になること
- A'. 「場所」がそこにあった「物」をすべて除かれた状態になること
- B'. 「物」と分離した「場所」が感覚的判断を伴った状態になること

ただし上の条件を満たさないにもかかわらず代換を成立させることができる動詞が三つある(「塗る」タイプ)。このタイプの動詞の代換には「部分的」対「全体的」という解釈の違いが見られるが、この特徴は「塗る」タイプの動詞の特殊性に起因するものである。

また、上に示した「壁塗り代換」の成立条件は、「ニ/デ格交替」という現象の成立条件としても有効である。

1. はじめに

本稿は一般に「壁塗り代換」と呼ばれている現象の成立条件について考察し、それを通じて位置変化動詞と状態変化動詞の接点を明らかにすることを目的とする。

本稿で扱う「壁塗り代換」とは、以下に示すような格の交替現象を指す。

- (1) a. 壁にペンキを塗る b. 壁をペンキで塗る
- (2) a. グラスに水を満たす b. グラスを水で満たす

上の(1)ではa文でヲ格をとっていた「ペンキ」がb文ではデ格をとり、a文でニ格をとってい

た「壁」がb文ではヲ格になっているが、a文とb文の基本的な意味は変わっていない。(2)についても同様のことが言える。

それではこのような「壁塗り代換」をおこす動詞とはどのような動詞なのであろうか。

(1)、(2)におけるa文は「ペンキ」や「水」の位置変化を表しており、b文は「壁」や「グラス」の状態変化を表していることから、「塗る」や「満たす」といった代換可能な動詞は「位置変化」と「状態変化」の両方を語彙情報として含む動詞であると考えられる²⁾。しかし、この「位置変化と状態変化の両方の語彙情報をもつ」という条件だけでは、代換可能な動詞と代換不可能な動詞を区別することはできない。次の例を見てほしい。

(3)a. 壁にペンキを付ける b. *壁をペンキで付ける

(3)で代換が不成立になるのは、「付ける」という動詞が「状態変化」に関する語彙情報をもっていないためであると考えられる。しかしではどうして(1)bの「壁」は状態変化しており(3)bの「壁」は状態変化していないと言えるのであろうか。この点を明らかにしない限り、「塗る」のような代換可能な動詞と「付ける」のような代換不可能な動詞が明示的に区別できたことにはならない。つまり「壁塗り代換」の成立条件を導くには、どのような「状態変化」を「壁塗り代換」における「状態変化」として位置付けるのかを明らかにする必要があるといえる。

以上のような理由から本稿では、「壁塗り代換」をおこす動詞は「位置変化」と「状態変化」の両方を語彙情報として含むということを前提とし、さらにこの場合の「状態変化」が具体的には何を指すのかを定義することによって「壁塗り代換」の成立条件を導くことを試みる(2節)。さらに3節ではこの条件が以下に示すような「ニ/デ格交替」という現象に応用できることについてもあわせて論じ、本稿で提示する「壁塗り代換」の成立条件の有効性を論証する。

(4)a. 紙にガムをつつむ b. ガムを紙でつつむ
(5)a. 毛布に赤ん坊をくるむ b. 赤ん坊を毛布でくるむ

以上述べてきたように本稿の中心的な作業は「壁塗り代換」における「状態変化」の内容を定義することになるが、ここで重要になるのが、「壁塗り代換」のb文で表される「状態変化」はa文で表される「位置変化」を前提としているということである。つまり「壁塗り代換」の成立条件を導くということは、「位置変化」によって引き起こされる「状態変化」とはどのようなものなのかということ、すなわち「位置変化」と「状態変化」の接点について論じることもでもあるといえよう。

2. 「壁塗り代換」の成立条件

2.1. 「場所の状態変化」の定義

以下では「壁塗り代換」における「状態変化」の内容を定義し、それによって代換可能な動詞と不可能な動詞の区別が可能になることを示す。

まず、「壁塗り代換」は使われる格のパターンによって、次の二つの種類に分けることができる。^{*3}

- I. a. 場所ニ 物ヲ(ガ) ～ / b. 場所ヲ(ガ) 物デ ～
 - (6) a. グラスに水を満たす b. グラスを水で満たす (他動詞)
 - (7) a. グラスに水が満ちる b. グラスが水で満ちる (自動詞)
- II. a. 場所カラ 物ヲ(ガ) ～ / b. 場所ヲ(ガ) ～
 - (8) a. テーブルから皿をかたづける b. テーブルをかたづける (他動詞)
 - (9) a. テーブルから皿がかたづく b. テーブルがかたづく (自動詞)

「壁塗り代換」は現象的に上のような二種類に分けられるが、どちらの場合もa文は「物の位置変化」を表し、b文は「場所の状態変化」を表すと考えられる。そして本稿では、これらの代換可能動詞の表す「場所の状態変化」を次のように定義する。

「壁塗り代換」における「場所の状態変化」^{*4}

- I. 「場所」が「物」と完全に結合した状態になること
 - A. 「場所」がその表面を「物」ですべて覆われた状態になること
 - B. 「物」と結合した「場所」が感覚的判断を伴った状態になること
- II. 「場所」が「物」と完全に分離した状態になること
 - A'. 「場所」がそこにあった「物」をすべて除かれた状態になること
 - B'. 「物」と分離した「場所」が感覚的判断を伴った状態になること

つまり、上に挙げた「場所の状態変化」A、B、A'、B'のうちのいずれかを語彙情報として含んでいれば、その動詞は代換可能な動詞ということになる。以下ではここで定義した「場所の状態変化」を、具体的な例文にそって説明していくことにする。

まずAに相当する例としては、次のようなものが挙げられる。

- (10) a. グラスに水を満たす b. グラスを水で満たす (以下他動詞)
- (11) a. 廊下にじゅうたんを敷きつめる b. 廊下をじゅうたんで敷きつめる

- (12) a. 壁にたくさんの
ポスターを張りつくす b. 壁をたくさんの
ポスターで張りつくす
- (13) a. テーブルに布を覆う⁹⁵ b. テーブルを布で覆う
- (14) a. グラスに水が満ちる b. グラスが水で満ちる (以下自動詞)
- (15) a. グラスに水があふれる⁹⁶ b. グラスが水であふれる

(10)では「グラス」が「水」で一杯になること、すなわち「グラス」の内側が「水」で覆われた状態になることが表されており、したがって「満ちる」という動詞には先に定義した「場所の状態変化」の定義Aに相当する語彙情報が含まれていることがわかる。(11)～(15)に関しても同様のことが言える。これに対し次のような「入れる」という動詞を用いた場合には、「グラス」は「水」で一杯になる必要はない。したがって「入れる」という動詞は「場所の状態変化」に関する語彙情報をもっていることにはならず、代換は不成立になる。

- (16) a. グラスに水を入れる b. *グラスを水で入れる

次にBを語彙情報としてもつ動詞について考えてみる。

- (17) a. 部屋に菓子をちらかす b. 部屋を菓子でちらかす (以下他動詞)
- (18) a. 壁に花を飾る b. 壁を花で飾る
- (19) a. 部屋に菓子がちらかる b. 部屋が菓子でちらかる (自動詞)

(17)や(19)では「部屋」に「菓子」が拡散することによって、「部屋+菓子」に「きたない」という感覚的判断が加わることが表されている。また(18)では「壁+花」に「きれいだ」という感覚的判断が加えられている。つまり「ちらかす」、「飾る」といった動詞にはBに該当する語彙情報が含まれているのである。これに対し次の例は文全体の意味は(17)に似ているが、代換は成立しない。これは「撒く」という動詞自体の中には「その場所を汚す」といった語彙情報が含まれていないからである。

- (20) a. 部屋に菓子を撒く b. *部屋を菓子で撒く

次にA'について考察する。A'の内容は「場所がそこにあった物をすべて除かれた状態になること」というものであったが、これに該当する「場所の状態変化」を表す動詞としては、次のようなものが挙げられる。

- (21) a. グラスから水を空ける b. グラスを空ける (以下他動詞)

- (22) a. グラスから酒を(一息に)飲みほす b. グラスを(一息に)飲みほす *7
(23) a. グラスから水が空く b. グラスが空く (自動詞)

(21)の「空ける」は、もともと「グラス」の中にあった「水」をすべて「グラス」の外に出すことを意味する。(22)、(23)についても同様のことが言える。これに対し次の「出す」を使った例では代換は成立しない。これは「出す」という動詞が必ずしも「物をすべてその場所から取り除く」ということを意味せず、したがって「場所が状態変化する」という語彙情報をもつことにはならないからであると考えられる。

- (24) a. グラスから水を出す b. *グラスを出す

最後にB'に挙げられた、「物と分離した場所が感覚的判断を伴った状態になる」という状態変化について説明する。

- (25) a. テーブルから皿をかたづける b. テーブルをかたづける (他動詞)
(26) a. テーブルから皿がかたづく b. テーブルがかたづく (自動詞)

(25)の「かたづける」は、「皿」のなくなった「テーブル」に「きれいだ」といった感覚的判断が加わることを表す。次の例と比べてほしい。

- (27) a. テーブルから皿をどかす b. *テーブルをどかす

(27)bが非文になるのは「どかす」という動詞が単に物をその場所から移すことを表すだけで、移した結果「場所」に感覚的判断が加わるかどうかには無関心なためである。

以上のように本節では「壁塗り代換」における「場所の状態変化」をA、B、A'、B'のように定義し、このうちのいずれかを語彙情報として含む動詞が代換可能な動詞であるとした。以下ではここで示された四種類の「場所の状態変化」が本質的には何を意味するのかについて考察したい。

AとBは、「場所が物と完全に結合し、一体化した状態になること」としてまとめることができる。Aでは「場所」の表面が「物」で覆いつくされた結果、その「場所」と「物」は一まとまりのものとして見なされるようになる。またBでは「場所」が「物」と結合した結果、その「場所+物」には一定の感覚的判断が加わるわけであるから、それらもまた一まとまりの単位として見なされていることになる。

また、A'とB'は「場所が物と完全に分離し、独立した一つの単位になること」としてまとめられる。A'では、もともとその「場所」にあった「物」がすべて排除されることによって「場

所」は新たに独立した単位となる。B' では「物」と分離した「場所」に対して一定の感覚的判断が加わるのであるから、この「場所」もまた独立した一つの単位として見なされていることになる。

「壁塗り代換」のa文は「物の位置変化」を表す文であるから、b文で表される「場所の状態変化」は「物」との結合あるいは分離を前提としている。「場所」が「物」と結合あるいは分離し、さらにそれが独立した一まとまりの単位として見なされるようになることが、「壁塗り代換」における「場所の状態変化」の本質であるといえよう。^{*8}

2.2. 特殊な代換可能動詞「塗る」タイプ

2.2.1. 「塗る」タイプとは

代換可能な動詞は「物の位置変化」と「場所の状態変化」の両方を表す動詞であるが、前節ではここでいう「場所の状態変化」をA、B、A'、B' のように定義することによって「壁塗り代換」の成立条件を導いた。しかし次に示すように、この条件を満たしていなくても代換の成立する動詞が三つある。

- | | |
|-------------------|--------------|
| (28) a. 壁にペンキを塗る | b. 壁をペンキで塗る |
| (29) a. 壁に白い壁紙を張る | b. 壁を白い壁紙で張る |
| (30) a. 腕に包帯を巻く | b. 腕を包帯で巻く |

これらの動詞は2.1で提示した「場所の状態変化」の定義A、B、A'、B' のいずれも語彙情報として含んでいない。最も近いと思われるのはAの「場所がその表面をすべて物で覆われた状態になること」であるが、「塗る」、「張る」、「巻く」という動作の結果、「場所」は必ずしも「すべて物で覆われた状態になる」わけではない。「満たす」や「覆う」などと違って、「場所」の一部分に「物」が付着するだけでもよいのである。つまりこれらの動詞は、それ自体は本稿で定義した「場所の状態変化」を含意していないことになる。本稿ではこのように「場所の状態変化」に関する語彙情報をもたないにもかかわらず代換が成立するという特殊な代換可能動詞を、「塗る」タイプと呼ぶことにする。

それでは、「場所の状態変化」に関する語彙情報をもたない「塗る」タイプの動詞が代換を成立させられるのはなぜであろうか。「塗る」、「張る」、「巻く」がもつ意味について考えてみると、これら三つの動詞が「動作主が場所の表面の形状にそって物を拡張させていく」という語彙情報を共通してもっていることがわかる。たとえば(28)では動作主は「壁」に「ペンキ」を位置変化させた後、その壁面の形状にそってペンキを広げていかななくては「塗る」という動作を行ったことにならない。(29)や(30)についても同様のことが言える。これに対し次の「付ける」のような代換不可能な動詞には、そのような語彙情報は見られない。動作主

は「物」を「場所」まで位置変化させるだけでよいのである。

(31) a. 壁にペンキを付ける b. *壁をペンキで付ける

この「場所の表面の形状にそって物を拡張させていく」という動作主の動作には、始まりと終わりがある。すなわち「始まり」とは動作主が「物」を「場所」に位置変化させ、これから場所の表面の形状にそって拡張させていこうとする瞬間であり、「終わり」とは「場所」にもはや「物」を拡張させるスペースがなくなった時である。つまり「塗る」タイプにおいては「物を場所の形状にそって拡張させる」という動作主の動作が終了した時点で、「場所」は「場所がその表面を物ですべて覆われた状態になる」という「場所の状態変化」の定義Aと同じ状況に至るのである。これにより「塗る」タイプの動詞はb文をとることが可能になり、代換が成立することになると考えられる。⁹⁾

2.2.2. 「塗る」タイプに見られる解釈の違い:「部分的」対「全体的」

2.2.1では特殊な代換可能動詞「塗る」タイプが代換を成立させられる理由について考察したが、ここでは「塗る」タイプの代換のみに見られる特徴について指摘したいと思う。「塗る」タイプの動詞の代換では、a文とb文に「部分的」対「全体的」という解釈の違いが存在する。

(32) a. 壁にペンキを塗る b. 壁をペンキで塗る

(32)aでは壁のどこか一部分にペンキが塗られるだけでもよいが、(32)bでは必ず壁全体にペンキが塗られるという解釈になる。このような「部分的」対「全体的」という解釈の違いは「塗る」タイプの代換に共通して見られるものである。

一方2.1で述べたような「塗る」タイプ以外の典型的な代換可能動詞を使った文では、このような解釈の違いは見られない。「部分的」、「全体的」という言葉で表すなら、常に「全体的」の解釈になる。このような違いは、「塗る」タイプの動詞が「動作主が場所の形状にそって物を拡張させる」という語彙情報をもつが、「場所の状態変化」に関する語彙情報はもっていないことから生じるものである。つまり、b文をとる時には「場所の状態変化」の定義Aと同じ状況、すなわち「物を拡張させる」という動作が終了した状況でなくてはならないのでその解釈は「全体的」となる。これに対しaの位置変化構文では「物」が「場所」の方に位置変化しさえすればよいので、「物を拡張させる」という動作は途中であってもよい。したがって「部分的」の解釈になり得るのである。一方「満たす」や「覆う」といった典型的な代換可能動詞は、その動詞自体の中にはじめから「場所の状態変化」の定義Aにあたる「場所がその表面をすべて物で覆われた状態になる」という語彙情報を含んでいるので、a、bどちらの構文を

とつてもその解釈は「全体的」となる。

「壁塗り代換」のa文とb文で解釈の異なる場合があることは奥津(1981)やFukui et al. (1985)にも指摘が見られるが、それらは個別的な指摘であり、その理由についても体系的には述べられていない。本稿では「塗る」タイプの動詞が「動作主が場所の形状にそって物を拡張させる」という語彙情報をもつことによって代換を成立させている点に注目し、「塗る」タイプに見られる解釈の違いがここに起因することを明らかにした。^{*10}

2.2.3. 典型的な代換可能動詞と「塗る」タイプを区別するテスト

以上、特殊な代換可能動詞「塗る」タイプについて述べてきたが、最後にこの「塗る」タイプの動詞と「満たす」、「覆う」のような典型的な代換可能動詞を客観的に区別するためのテストを提示しておく。以下に示すように代換可能な動詞を「物ガ場所ヲ～」という構文にあてはめてみると、適切な文になる場合とならない場合がでてくる。適切になるのは典型的な代換可能動詞であり、非文になるのは「塗る」タイプの動詞である。

- (33) 水がグラスを満たしている^{*11}
- (34) 布がテーブルを覆っている
- (35) 花が壁を飾っている
- (36) ポスターが壁を張りつくしている
- (37) じゅうたんが廊下を敷きつめている
- (38) *ペンキが壁を塗っている
- (39) *白い壁紙が壁を張っている
- (40) *包帯が腕を巻いている

それではこの「物ガ場所ヲ～」というテスト構文によって「塗る」タイプの動詞と典型的な代換可能動詞が区別できるのは、なぜであろうか。テスト構文は「場所」をヲ格にとっていることから、代換b文(「場所ヲ物デ～」)と同じく「場所の状態変化」を表す文であると考えられる。しかし「塗る」タイプの動詞は代換b文はとれてもテスト構文はとることができない。この理由は代換b文とテスト構文の構造の違いにあると考えられる。

「(動作主ガ)場所ヲ物デ～」(代換b文)	[動作主[場所の状態変化]させる]
「物ガ場所ヲ～」(テスト構文)	[場所の状態変化]

上の図からわかるように、テスト構文では「場所の状態変化」のみに焦点があたっているが、代換b文には動作主が存在し、動作主が動作を行うことにも焦点があたっている。前述したように「塗る」タイプの動詞は動詞主が「場所の表面の形状にそって物を拡張させる」という

動作を終了することによって状態変化したのと同じ状況に「場所」を至らせるのであって、「場所の状態変化」に関する語彙情報を直接もっているわけではない。「場所の状態変化」のみに焦点のあたる、「動作主による動作」の存在しないテスト構文をとることができないのはそのためである。これに対し「満たす」などの典型的な代換可能動詞ははじめてから「場所の状態変化」に関する語彙情報をもっているので代換b文にもテスト構文にも対応することができる。

「物が場所ヲ〜」という構文がテスト構文として有効な理由は以上のように説明される。

2.3. 2節のまとめ

本節前半では「壁塗り代換」における「場所の状態変化」の定義を提示し、これによって代換可能な動詞と不可能な動詞の区別が可能になることを示した。また後半では「塗る」タイプが代換を成立させる仕組みや「部分的」対「全体的」という解釈の違いを生じさせる理由について論じた。これらは「壁塗り代換」における「場所の状態変化」の定義を行ってはじめて明らかにできたことである。

3. 「ニ/デ格交替」への応用

本節では、「ニ/デ格交替」という現象をとりあげる。「ニ/デ格交替」は交替する格が一組であり、したがって格が二組交替する「壁塗り代換」とは現象的に異なるものであるが、後述するようにその成立条件は「壁塗り代換」で提示したものと同じであると考えられる。この節では2節で提示した「壁塗り代換」の成立条件が、「ニ/デ格交替」という、代換とは異なる現象の成立条件としても有効なことを示すことを目的として考察を行う。

3.1. 「ニ/デ格交替」の成立条件

本稿では次に示すような二格とデ格の交替現象を「ニ/デ格交替」と呼ぶ。

- | | | |
|-------------------|---------------|---------|
| (41)a. 紙にガムをつつむ | b. ガムを紙でつつむ | (以下他動詞) |
| (42)a. 毛布に赤ん坊をくるむ | b. 赤ん坊を毛布でくるむ | |
| (43)a. 土に種を埋める | b. 種を土で埋める | |
| (44)a. 袋に魚を密閉する | b. 魚を袋で密閉する | |
| (45)a. 布団に本を隠す | b. 本を布団で隠す | |
| (46)a. パンにハムをはさむ | b. ハムをパンではさむ | |
| (47)a. 土に種が埋まる | b. 種が土で埋まる | (以下自動詞) |
| (48)a. 雲に月が隠れる | b. 月が雲で隠れる | |

(41)のa文では「ガム」が「紙」の方に位置変化することが表され、b文では「ガム」がその表面を「紙」で覆いつくされるという、「ガム」の状態変化が表されている。(42)以下の例でも同様のことが言える。このことからわかるように、「壁塗り代換」と同様に「ニ/デ格交替」のa文は位置変化構文であり、b文は状態変化構文である。しかもb文の表す状態変化は、「場所がその表面をすべて物で覆われた状態になる」という、「壁塗り代換」における「場所の状態変化」Aと全く同じものである。つまり「壁塗り代換」の成立条件はそのまま「ニ/デ格交替」にも適用されるわけであるが、「代換」と「格交替」という異なる現象が同じ成立条件をもつとはどういうことであろうか。次の二つの例を比べてほしい。

- (49) a. ガムに紙を覆う b. ガムを紙で覆う
 (50) a. 紙にガムをつつむ b. ガムを紙でつつむ

(49)は「壁塗り代換」、(50)は「ニ/デ格交替」の例である。(49)では位置変化するもの(a文のヲ格名詞)が「紙」であり、状態変化するもの(b文のヲ格名詞)は「ガム」である。これに対し、(50)では位置変化するもの(a文のヲ格名詞)も状態変化するもの(b文のヲ格名詞)も「ガム」である。つまり「壁塗り代換」においては位置変化するものと状態変化するものが別々であるのに対し、「ニ/デ格交替」においては位置変化するものと状態変化するものが同一なのである。

このように「壁塗り代換」と「ニ/デ格交替」は「位置変化するもの」と「状態変化するもの」が別々であるか同一であるかという点で異なっており、そのために両者は「代換」と「格交替」という異なる現象として現れる。しかしa文は位置変化を表しb文は状態変化を表すというように、両者の構造は基本的には同じである。また「ニ/デ格交替」をおこす動詞の表す状態変化は、2節で提示した「壁塗り代換」における「場所の状態変化」の定義Aに相当するものである。このような「ニ/デ格交替」の存在は本稿で提示した「壁塗り代換」の成立条件の有効性を裏付けるものであるといえよう。

3.2. 「ニ/デ格交替」に見られる制約

3.1で見たように、「ニ/デ格交替」には「位置変化するものと状態変化するものが同一である」という特質がある。そしてこの特質のために「ニ/デ格交替」の成立に関しては、「壁塗り代換」には見られなかった制約が存在することになる。ここではこの「ニ/デ格交替」における制約について触れておく。

「壁塗り代換」においても「ニ/デ格交替」においても、a文は位置変化構文である。したがってこれらのa文には「ヲ格名詞で表されるものがニ格名詞で表されるものの方へ向かう」という位置変化の方向性が含意される。

(51)a. グラスに水を満たす (代換: 水→グラス)

(52)a. 布団に本を隠す (ニ/デ: 本→布団)

一方「壁塗り代換」においても「ニ/デ格交替」においてもb文は状態変化構文であり、したがって位置変化の方向性に関しては無指定なはずである。しかし実際にはb文においてもヲ格名詞の表すものの方にデ格名詞の表すものが位置変化するという解釈が生じる。

(53)b. グラスを水で満たす (代換: 水→グラス)

(54)b. 本を布団で隠す (ニ/デ: 布団→本)

(51)～(54)の例から明らかなように、「ニ/デ格交替」ではa文とb文とで位置変化の方向が逆になっている。これは、「位置変化するものと状態変化するものが同一である」という「ニ/デ格交替」の特質から生じるものである。

以上のことは、「ニ/デ格交替」においては二つの名詞の表すものが(50)、(52)の「本」と「布団」のようにどちらも移動可能なものでなくてはならないということを示している。

(55)a. ポケットに飴を隠す (飴→ポケット)

(56)a. *飴をポケットで隠す (*ポケット→飴)

上の例で「ポケット」は移動不可能なものであり、したがって「ニ/デ格交替」は成立しない。これに対し「壁塗り代換」においてはこのような制約は見られない。二つの名詞のうちどちらか一方が移動可能なものであれば代換は成立する。

(57)a. 壁にペンキを塗る (ペンキ→壁)

(58)a. 壁をペンキで塗る (ペンキ→壁)

以上3.2では「ニ/デ格交替」に「両方の名詞が移動可能なものを指さなければならない」という制約が存在することを指摘し、それが「位置変化するものと状態変化するものが同一である」という「ニ/デ格交替」の特質に起因するものであることを述べた。

4. まとめ

本稿では位置変化動詞と状態変化動詞の接点に関わるともいえる「壁塗り代換」の成立条件を求めることを目的として考察を行ってきた。2節では「壁塗り代換」における「場所の状態変化」の定義を行うことで代換の成立条件を導き、さらに特殊な代換可能動詞「塗る」タイ

プについての考察も行った。また3節では本稿で提示した「壁塗り代換」の成立条件が「ニ/デ格交替」の成立条件としても有効であることを示した。

注

- *1 本稿は筑波大学日本語・日本文化学類に提出した卒業論文の一部を抜粋しまとめたものである。詳しい分析については川野(1996)を参照されたい。
- *2 奥津(1981)は、「壁塗り代換」をおこす動詞は移動動詞としての側面と変化動詞としての側面をもった「移動変化動詞」であると論じている。またKageyama(1980)は、Theme Transfer(対象転位)という格の移動規則によって「壁塗り代換」を説明している。
- *3 Iは奥津(1981)の「付着、移入、拡散」、Kageyama(1980)のattachingに相当し、IIは奥津の「移出、離脱」、Kageyamaのremovingに相当する。また、「場所」、「物」といった用語は代換のa文とb文の対応関係をわかりやすく示すために本稿において便宜的に用いたものである。
- *4 本稿の目的は成立条件を導くことであるから、問題になるのは文ではなく動詞自体のもつ語彙情報である。A、B、A'、B'が文全体の表す意味ではなく動詞の語彙情報であることに注意されたい。なおI、IIの番号はそれぞれ格パターンI、IIに対応する。
- *5 (13)aは人によって許容度に差がみられるようである。
- *6 (15)aは「グラスに水が一杯である」という状況を表している。「あふれ出る」の意味ではないことに注意。
- *7 (22)は奥津(1981)から引用した。
- *8 「壁塗り代換」の成立条件としては「物」が「場所」と結合、あるいは分離すること自体が重要なのであり、結合するまで、あるいは分離してからの「物」の移動過程はさほど問題にならない。こうした理由から本稿では「物の移動」ではなく「物の位置変化」という表現を用いている。
- *9 英語でも「塗る」に相当するpaintなどは代換をおこすが、本稿でいう典型的な代換可能動詞に当たるfill(満たす)やcover(覆う)といった動詞は代換をおこさない。本稿では英語における代換には言及しないが、興味深い事実として指摘しておく。
- *10 Kageyama(1981)は、英語のspray paint hypallageにおいては常にpartitive(部分的)対holistic(全体的)という解釈の違いがみられることを指摘している。
- *11 例文は「テイル」形で示している。なお(36)、(37)は若干許容度が落ちるが、完全に非文となる(38)以下とははっきり区別される。

参考文献

- 安平 鑑 (1996) 「自動詞文における格の代換について —— 「発生」と「移動変化」をめぐって、「あふれる」を中心に —— 」『日本語と日本文学』第23号 pp.13-22 筑波大学国語国文学会
- 奥津 敬一郎 (1980) 「動詞文型の比較」『日英比較講座 第2巻 文法』 國廣哲彌編 pp.63-100 大修館書店
- 奥津 敬一郎 (1981) 「移動変化動詞文 —— いわゆる spray paint hypallageについて —— 」『国語学』127 pp.48-60

- 川野靖子 (1996) 「いわゆる『壁塗り代換』の成立条件」筑波大学日本語・日本文化学類卒業論文
- 工藤真由美(1982)「シテイル形式の意味記述」『人文学会雑誌』 pp.51-88 武蔵大学人文学会
- 國廣哲彌 (1970) 『意味の諸相』三省堂
- 定延利之 (1990) 「移動を表す日本語動詞述語文の格形表示と、名詞句指示物間の動静関係 —— 「弾が的に当たる」と「的が弾に当たる」、「弾を的に当てる」と「的を弾に当てる」 ——」『言語研究』98 pp.46-65
- 山中信彦 (1984) 「場所主語文型・場所目的語文型と意味的要因」『国語学』139 pp.43-53
- Fukui, Naoki, Shigeru Miyagawa, and Carol Tenny (1985) "Verb Classes in English and Japanese: Case Study in the Interaction of Syntax, Morphology, and Semantics" Lexicon Project Working Paper #3, Center for Cognitive Science, MIT, Cambridge, MA.
- Kageyama, Taro (1980) "The Role of Thematic Relations in the Spray Paint Hypallage" Paper in Japanese Linguistics 7, pp.35-64
- Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav (1991) "Wiping the Slate Clean: A Lexical Semantic Exploration", pp.123-151, eds. Beth Levin and Steven Pinker Lexical and Conceptual Semantics, Blackwell.
- Levin, Beth (1993) English Verb Classes and Alternations, The University of Chicago Press.

(1997年8月31日 受理)